資料　3

2013/05/30

信州大学農学部　大窪久美子

# 草原管理としての火入れ（野焼き）の影響

かつて草原は、堆肥や飼料としての植物資源を供給する場として、人々の暮らしや生産活動に必要不可欠な存在でした。そのため、草原として維持するための管理技術が、各々の集落に受け継がれてきたものでした。

一般的には、草原としての管理は毎年１，２回の草の収穫、すなわち刈り取りという形で行われてきました。現在では、植物資源としての利用はありませんので、収穫されることはなくなりましたが、かつては、利用されることによって、おのずと草原として維持管理されることになっていたわけです。

火入れによる管理は、いわば収穫（刈取り）後の付随的な手段で、一部に枯れ残った植物体を焼いて、春の植物の出芽の伸長を促すために、実施されることが一般的であったと考えられています。

霧ケ峰でみられる草原性植物の多くは、毎年 1，2 回は植物体が収穫され、有機物が収奪される貧栄養の土壌条件下を生育適地としています。ですので、もし、収穫（刈り取り）をせずに火入れだけの管理を実施すれば、植物体の有機物が灰になって蓄積し、土壌の富栄養化を促進させ、いずれは草原性植物の生育には適さない環境へと変化していくことが考えられます。また、火入れだけでは、レンゲツツジやノリウツギ、ヤマハギなどの木本植物は完全には枯死せず、再生することがほとんどなので、これらの樹木を抑制し、草原として維持していくためには、やはり刈取りが必要であることが知られています。

火入れのみでは、草原植生の遷移の進行を止めることはできないため、刈り取りで優占する多年生植物や木本植物を抑制し、さらには土壌に有機物が蓄積されないように、これらの植物体を草原外へ持ち出し、常に貧栄養な土壌条件を維持する必要があります。

また、草原植生は多様な管理を行えば、より多様な群落が成立するとも考えられますので、火入れのみの単一な管理では、単一な群落しか期待できません。火入れで簡単に大面積の草原を維持、再生できるという考え方には、問題があると考えられます。草原として維持していくためには、やはりある程度の手間が必要なのです。

また、管理手法の安全性についてですが、多くの地域では、かつての火入れの技術がすでに失われてしまっております。例えば、火入れ後の火のまわり方を予測するためには、長い間の経験が必要になります。一部の限られた面積で絶対的な安全性を確保した上で、火入れという草原管理の技術を復活させることは、文化的な側面からみても意義のあることですが、これだけでは、本来の草原には復元できないと考えられます。

上記は、これまで生態学で蓄積されてきた知見に基づく、一般的な火入れの影響についての考察したものです。今後の草原管理にご参考いただければ、幸甚です。